

# 死の訪れを持たずして葬られたBrowning

## の登場人物たち

渡 邊 清 子

### はじめに

前号（紀要第6号）にて意味深長な作品“*The Statue and The Bust*”を取り上げ、それに含まれている Browning の真意はどこにあるか探ってみた。しかし今回の稿を始めるにあたり、重複すると思うが、前号の物語の内容を簡単に述べておきたい。というのは、今度扱うものゝ内容と思想的に密接な関係があるので Browning の思想をより良く理解する助けになると思うからである。

Florence の太公 Ferdinand I の凛々しい馬上姿を初めてみた時から Riccardi の新夫人の胸に恋の炎が熱く点ぜられた。太公も又同じく、彼女に目を止めた瞬間から、今まで空虚だった自分の心の中に新たな魂が吹き込まれたような激しい感動を覚えたのであった。2人の恋心をいち早く察知した夫の Riccardi は夫人を宮殿の中の窓が1つしかない部屋に閉じ込めてしまった。夫を愛し得ぬ新妻は、折を見て太公の許に走りたいと切望した。太公も又彼女を連れて逃亡しようと心にきめた。しかし2人はそれぞれの理由や都合に妨げられ、逃避行を実行に移し得なかった。夫人は幽閉された部屋の高窓から、馬上ゆたかに、毎日広場を通りすぎる太公の姿にじっと目をとめていた。太公も又窓を仰ぎみることによってのみ、彼女と相見ることが出来たにすぎなかった。

かくして歳月是一日、一日流れ去り、あれ程激しく燃えたお互いの愛の熱情も冷え切ってしまった。そればかりか、美しかった2人の姿をいたましまいに変貌させてしまった。両人は空しく朽ちて行く青春を惜しみ、太公は広場に

かつての自分の貴公子然とした馬上姿さながらの“statue”を作らせた。一方夫人もかつての若く美しかりし Riccardi 新夫人の姿を模して胸像を作らせ、窓辺に置いたと Florence の町の人々はのべ伝えている。

この悲恋物語を書いた Browning の真の目的はなへんにあるかを巡って彼の愛読者たちは困惑し、判断に苦しめられた。しかし作者の意図については前号に記した如く、彼は明瞭にそれを表明している。参考のため彼の下した「判決」を少々思い浮べてみよう。

Sutherland Orr はこの作品は前号で触れたように“infirmity of purpose”<sup>①</sup>に対する警告であるとしている。彼女が言うように、恋人たちの 念願した恋の道が、第三者の目から見て、たとえ「善なるもの」に見えなくても、それに向かつて全精力を傾けて実現させるべきであったと作者は考えたのである。彼の主張する所に従えば、真剣に人妻と愛し合ったのも何かの定めであろうから、強行な手段を取っても初志を貫くべきだったと言うことになる。そしてそれが真に人生を意義あらしめる唯一の道だと説いている。

Fotheringham も前記の如く、Browning を代弁するかのように、“...to postpone action, to vacillate, is not right; it is only weak. Virtue does not lie in indecision and delay, and final indifference and futility a statue-and-bust sort of life.”<sup>②</sup>と申明している。Browning は二人の不幸の原点はこゝにあると言いたいのである。Browning のこの思想の流れは“ Youth and Art ”を初め“ The Worst of It ” または“ Dis Aliter Visum ”及び“ Too Late ”の中に“ variations on a single theme ”として流れ続けているのが察知できるのである。本号では初めに“ Youth and Art ”をその例として解説を試みたい。

① Sutherland Orr; *A Handbook To The Works of Robert Browning* (G. Bell And Sons, Ltd., London, 1927) p. 205.

② James Fotheringham; *Studies of the Mind and Art of Robert Browning* (Horace Marshall and Son, London, 1900) p. 209.

(A) Youth And Art<sup>③</sup> について

この詩の題にある ' Youth ' は色々なイメージを含んでいるので、何と訳すべきか幾日も考えたが、結局「ある青春と芸術」とすることにきめた。詩の書かれたのは1961年と推察されているが、1864年に *Dramatis Personae* に所載された。これには、現代風の恋愛観が Symons がいうように “ ...wise humor, sharp characterisation, and ballad-like simplicity.”<sup>④</sup> で書かれている。17連からなる作品である。詩形は iambus と anapaest を交えた各行が、3つの stress を持つ quatrain からなっているものである。軽快な響きとリズム感とが感ぜられるのは、偶数行の終りに extra syllable が附加され、double rhyme を構成している所が多いからであろうか。Browning は monologue の達人だと言われているが、この詩においても Kate Brown という一流の女流声楽家を語り手として、見事に登場させている。彼女は若かりし頃、一人の青年彫刻家に対して恋心を抱いていた。しかし終にそれを果たせることもなく、時を空しく過ごしてしまった。それを後になって無念に思いつつ、青春時代のことを振り返り、もはやそこに姿なき彼に対して、あたかもそこにいるかの如く想像をめぐらし話しかける独白である。

Browning の書いた monologue の大部分は文字通りに和訳しただけでは、到底その真意を理解して貰えないと思う。それ故、この詩の場合は特に、くわしく situation を説明し、“the Speaker”即ち、Kate Brown の言葉の大意を意識する形を取り「 」の中にそれをに入れて他の部分と区別することにした。

I

It once might have been, once only:

③本論文に引用した詩行はすべて下記の書による。Sir F. G. Kenyon (with introduction by ); *The Works of Robert Browning*; Centenary Edition in Ten Volumes, (Ams Press, Inc., New York, 1966) Vol. 4, pp. 308-310.

④ Arthur Symons; *An Introduction To The Study of Browning* ( J. M. Dent & Sons Ltd., London, 1923 ) p. 139.

We lodged in a street together,  
You, a sparrow on the housetop lonely,  
I, a lone she-bird of his feather.

(II. 1~4)

Kate Brownの開口一番、即ちこの1行目の初めの“it”がこの詩のkeynote となって、結論となる最終行とびったり呼吸が合い、彼女の悲哀感を最高に表現させている。Browning の手法は見事と言わざるを得ない。勿論この“it”は若き2人の芸術家の卵が、互いの恋心を率直に打ち明け合い、その完成に邁進して行くことを指している。そう成り得る chance は少なくとも1回だけはあったものを、と彼女は託つ。

Dallas Kenmare も此の点に注目してか、最初の出だしの行と最終行とをからませて次のように述べている。“In the short, apparently simple—even, it might seem trifling—poem *Youth and Art*, a similar disaster is portrayed: ‘It might have been, once only...’ The chance comes only once, and the lovers ‘missed it, lost it for ever’...”<sup>⑤</sup> その1回しかめぐって来ない chance を掴まなかったなら、もうおしまいだ。2人の若い恋人は取り返しのつかないことをしてしまって、味気ない人生をすごすことになったと言うのである。ともあれ、若き日のKate Brown と青年彫刻家 Smith との生活を彼女の語る所によってうかがってみよう。彼女は

「私達2人は同じ通りに、向かい合った部屋を借りて住んでいました。あなたはまるで屋根裏に住みついた独りぼっちな雀、私はあなたと同じ仲間の孤独な雌雀でした。」という。

彼女はその通りがどこにあるのか明らかにしていないが, De Vane 及びBer-

⑤ Dallas Kenmare; *An End To Darkness. A New Approach to Robert Browning* ( Peter Owen Limited, London, 1962 ) p. 132.

doeによれば、それはRomeということになる。De Vane は “The Bohemian atmosphere of the poem is that of the artistic colony in Rome, where John Gibson ( 1790-1866 ), the sculptor mentioned in the poem, had his studio.”<sup>⑥</sup>と通りがローマにあると考えられる根拠をあげている。Berdoe は簡単に “ They lodged in the same street in Rome.”<sup>⑦</sup>と記しているだけである。一般には種々な理由からRomeであると認められているようである。第一連の中にある語句から察してみると、その青年は屋根裏部屋にしか住めない貧乏学生だったようである。彼女も彼と同じく芸術の道をたどる淋しい独りものであったらしい。彼女の独白は以下のように続く。

## II

Your trade was with sticks and clay,  
You thumbed, thrust, patted and polished,  
Then laughed “They will see some day  
“Smith made, and Gibson demolished.”

(ll. 5~8)

『あなたのお仕事は塑像<sup>しん</sup>の心を作るため棒や粘土をまさぐる。粘土を親指で押しつけたり、へらで抉ったり、塗ったり、掌で叩いたり、ならしたりすることでした。それでもあなたは高らかに笑って、「世の人々はいつの日にか、この名もないSmithが名を挙げ、かのGibson<sup>⑧</sup>の名声<sup>⑧</sup>が地に落ちるのをみるであらう。」と思われていたのでしょう。』

## III

⑥ William Clyde DeVane; *A Browning Handbook* (F. S. Crofts & Co., New York, 1935) p. 269.

⑦ Edward Berdoe; *The Browning Cyclopaedia* (George Allen & Unwin Ltd., London, 1931) p. 571.

⑧ John Gibson ( 1790-1866 ) は当時英国第一流の彫刻家で、神話にちなんだ画題が多くみられる。彼は当代の巨匠 Canova や Thorwaldsen に大なる影響を受けた。F. G. Kenyon によれば彼は “... was well known to Browning in Rome, long before the exhibition of his famous “Tinted Venus” and other works in London at the International Exhibition of 1862.” ということである。(注3. Vol. 4, p. xxxv )

My business was song,song,song;  
I chirped,cheeped,trilled and twittered,  
"Kate Brown's on the boards ere long,  
"And Grisi's existence embittered!"

(ll. 9-12)

『私の仕事は歌，歌，歌で明け暮れました。蟋蟀のように玉をころがす声を出し，小鳥のようにさえずり，震え声で，又早口に歌い続けました。「間もなく私，Kate Brownは晴の舞台に立つようになるだろう。そうすればGrisiの地位は危くなる！」と思いました。』

このように一流の彫刻家を目指すSmithも，一流の音楽家を夢見るKateもまだ若く，野心と希望に胸をふくらませていた。しかし世の中はそんなに甘くなく，2人は各，貧乏と困難とに直面しなければならなかった。

#### IV

I earned no more by a warble  
Than you by a sketch in plaster;  
You wanted a piece of marble,  
I needed a music-master.

(ll. 13-16)

「私が頼まれて1回歌っても，あなたが1回石膏で習作を作った程のお金しか貰えなく，お互いに金もうけはできなかったのですね。それでもあなたはほんものの彫刻をするために，どうしても大理石がほしかったのです。私の希望したものは私を鍛えてくれる歌の教師でした。」

#### V

We studied hard in our styles,  
Chipped each at a crust like Hindoos,  
For air looked out on the tiles,

For fun watched each other's windows.

(II 17~20)

「私達は芸術修行にいそむ若い人々が、銘々の流儀に従って生活しているように、パンのかけらを嗜りながら、すごしましたね。丁度ヒンズー教徒が粗食に甘んじるように。時折、気晴らしのため、窓を開いて見ますと、見えるのは向かい側の屋根ばかり。それでも何かの拍子で相手の窓が開いているのが見えたりすると、とても嬉しくなって覗いてみたのです。」

VI

You lounged, like a boy of the South,  
Cap and blouse—nay, a bit of beard too;  
Or you got it, rubbing your mouth  
With fingers the clay adhered to.

(II .21-24)

「あなたは南歐の青年芸術家達がよくするように、ぶらぶらと街の中を漫歩なさいました。ベレ帽に、artistsが好んで身につけた仕事着姿で。いや、そればかりでなくお髭も生やしていたようでした。生やしたのではなくて粘土をいじっていて汚したお指で、口の辺りを触った時にそれがついたのだったかしら。」

KateはこのVI連でみられるように、細かにSmithの様子を観察してしている。餘程彼に関心があり、引かれていたものと思われる。GibsonやGrisi<sup>⑨</sup>が活躍していた頃といえ、19世紀の半ば頃であるから、ローマは丁度、音楽や彫刻、絵画や建築等、芸術の都として繁栄し、若者たちが集まって来ていた。それでSmithやKateもまだ封建的な匂いの残るイギリスから、自由奔放に振舞える芸術の都を目差してひとりで故郷を出て来たのだろう。それ故二人は淋しさからと、共にイギリス出身だというよしみからか、互に関心と好意を寄せ合った

⑨ Giulia Grisi (1812-69) はイタリアの北部 Milan 生れで、オペラのソプラノ歌手として名声を博した。その美声と美貌をもって当代一流の歌手として Rome や London や Paris で華やかに活躍した。

ものと思われる。次の連を読んでみるとSmith青年の動静が知れ、微笑ましい。

VII

And I—soon managed to find  
Weak points in the flower-fence facing,  
Was forced to put up a blind  
And be safe in my corset-lacing.

(Il. 25-28)

「それから私は間もなく、“flower-fence”という刺のある灌木を植えて目隠しはしてあるが、その枝々の透き間から、あなたが覗いているのではないかと気付きました。それで、見られないようにするため、目隠しを別におかざるを得なかったのです。そうすれば私は安心して、コルセットの紐を締めることが出来ると思ったのです。」

彼女はかつてのSmith青年に以上の様に話しているが、彼の窓から彼女がコルセットを締めるのを見られる可能性があるとはんと考えたのであろうか。自分が好感を持つ男性の気を引く積もりであったかどうか定でないが、見られているという気配を感じた時、若い女性であるならハッと、目かくしをしようとするのは当然であろう。しかしこのKateの場合、あるいは男の気を引くことを少しは計算にいられたのかも知れないと疑いたくなる節がある。だがこれはKate独りだけに言えることでなく、Smithの側に於いても彼女にひかれ、秘かに覗き見ていたことは7連の状況から十分窺い知られると思う。

Sutherland Orrはいみじくも“...they watched and coquetted with each other, though they neither spoke or met;”<sup>⑩</sup>と2人の関係について、かなり具体的に説明をほどこしている。

VIII

No harm! It was not my fault

⑩ Sutherland Orr; *ibid.*, p. 298.



If you never turned your eye's tail up  
As I shook upon E *in alt*,  
Or ran the chromatic scale up:

(II. 29-32)

「前に述べましたような心遣から、私の姿が見えないようにしたからとて、何の差し支えもありませんでした。又私が普通の人以上に高音のEの音を美しく、声を震わせて歌ったとしても、或いは又、半音ずつ上る音階を、低音から高音まで、急なテンポでのぼって行く至難の技を、オペラ歌手である私が披露して聞かせても、あなたは感動の気配すら見せては下さらなかったのです。目尻をあげて私に惹きつけられる様子も示されたこともなかったのです。私があなただの気を引こうとしても、応じていただけなかったのは、私の責任ではなかった筈です。」

彼女はこのように折々のことを思い出して、うらめしく思うのだった。色々な手段を講じて、男の心を惹きつけることがかなわなかったのも、彼女はいらだたしさを示し始める。

## IX

For spring bade the sparrows pair,  
And the boys and girls gave guesses,  
And stalls in our street looked rare  
With bulrush and watercresses.

(II. 33-36)

「そうこうするうちに、時は流れ、人恋しく、血潮の騒ぐ春が訪れて来て、雀たちに、お互に相手を見つけてmateする(番う)ように求めました。街中の店頭の台の上にはcat's tail(蒲の類)や、みずかしらが積み重ねられ、お客様の訪れを待ちながら、いきいきした春の装いをつけていました。」

Kate Brownは恐らく溜息をつきながら、春の宵には、Smithから何らかの愛の表示があるかも知れないと、期待し、待ち望んでいたに違いない。J. Fotheringhamは2人の関係について“ They had something more than kindness for each other, and might have helped each other. But with fame and fortune to make, they had no room in their lives for simple love.”<sup>⑩</sup>と述べている。確かに男の方についてそう言えるかもしれないが、少くもKateの場合、そう言いきれないものがあつた。というのは、次の連でみられるように、彼女はもし男からの誘いがあれば、それを受ける用意を秘かにもっていたように思われるからである。

## X

Why did not you pinch a flower  
In a pellet of clay and fling it ?  
Why did not I put a power  
Of thanks in a look, or sing it ?

(II. 37-40)

「あなたが少しでも、私に興味をお持ちになっておられたのでしたなら、なぜ粘土を丸め小さなつぶてを作り、その中に花をはさんで私の窓に投げ込まれなかったのでしょうか。私は私でなぜ精一杯の感謝の想いを、目でもって、又歌をもってお答え出来なかったのでしょうか。」

彼女はSmithがいじり続けている粘土を投げしてくれさえすれば、それに歌をもって応じる用意があつたのに。それも出来なかったではないか。と今更の如く、くりごとを言う。ここで彼らはおそらく一生に一度しか与えられない大切な機会を逃してしまうことになつたのである。

## XI

I did look, sharp as a lynx,

<sup>⑩</sup> James Fotheringham; *ibid.*, p. 424.

(And yet the memory rankles)

When models arrived, some minx

Tripped up-stairs, she and her ankle.

(II. 41-44)

「私は大山猫のような鋭い目でじっとこちらからみていました。(今でもその時受けた心の痛手が疼き、不愉快になりますけれど・・・) あなたの所に通っていたモデル達、その中には、はねっかえりのお転婆娘たちもいましたが、いかにも足音軽やかに、足早に、美しい足首をのぞかせて階段を登って行っておりました。」

Kateは遠くからみているだけで、一步も足を踏み入れることが許されていない愛する男の屋根裏部屋に、彼女の見も知らぬ女共が、得意気に上って行くのを見て激しい嫉妬を覚えたのは顔ける。殊に駈け上って行く足のしなやかさが、どんなにか男心をそそっているだろうと、嫉ましく、気になったらしい。それで自分も負けてはいられないと思うのであった。

## XII

But I think I gave you as good!

“That foreign fellow,—who can know

“How she pays, in a playful mood,

“For his tuning her that piano ?”

(II. 45-48)

『でも、私は負けていないで、あなたが私にしたと同じことの仕返しをする積りになりました。私は名も知れぬ異国のピアノ調律師を部屋に出入りさせることにしました。あなたは秘かにそれをみて、「あの向い側にいる女は、あの異国の奴に調律をして貰っているようだが、たわむれ気分、どんな礼をしてやっているのか、わかったものじゃない」と思っておられたのでしょうか。』

彼女はこのようにして、何とか男の関心を自分の方に振り向けようと懸命に努力した。しかし結果は梨のつぶて同然であった。彼女は絶望的な気持になるのを押さえて、皮肉っぽく、挑戦的ではあるが、もう一度、次の如く、男の心の打診を試みた。

## XI

Could you say so, and never say

“Suppose we join hands and fortunes,

“And I fetch her from over the way,

“Her, piano, and long tunes and short tunes ?”

(II. 49-52)

『あなたはこうおつしやるのが、出来たのかしら、それとも次のように、どうしてもおつしやれなかったのかしら？「手に手を取って、一緒になって稼ぎ、生活を共にしようじゃないか。そうすれば僕は道をわたって、そちらまで君を迎えに行き、こちらに連れて来てあげるよ。君の大事な長い楽譜や短い楽譜を添えて、君の唯一の財産であり商売道具であるピアノも運んであげるよ。」と。』

Kateはどんなに青年Smithがそう言ってくれるのを待ち望み、期待したことであろう。しかし彼はいつ再び訪れるか判からない、一生一度の恋を成就させ、誠の仕合せを勝ち取るための勇気も、熱情も振いおこさなかった。2人は、もはや、元え戻れぬ道をたどり始めたのであった。

## XIV

No, no: you would not be rash,

Nor I rasher and something over:

You've to settle yet Gibson's hash,

And Grisi yet lives in clover.

(II. 53-56)

「いいえ、あなたはこんなことをおつしやる程、無謀で無分別ではなかったのです。私も当然そうあるべきでした。私の方から、男性であるあなたの気を引くような無分別は、つつしむべきでした。あなたには彫刻界に君臨している巨匠Gibsonを打ち負かさねばならない大目的がありました。私には、まだ羽振りよく、ぜいたくに暮らしている大声楽家Grisiを顔色なからしめるという野心があった筈でした。」

かくして、2人の青春は富と名声とを求めることで明け暮れることになってしまったのであった。それから幾歳月かが夢の如く過ぎ去り、2人の努力の甲斐があつてか、兩人の上にそれ相応の身分の変化が起こっていた。2人はどこかの社交場で久方振りに会ったのだろう。XV連以下は会ったその時の兩人の現状について語り合っている所である。

XV

But you meet the Prince<sup>⑫</sup> at the Board,  
I 'm queen myself at *bals-pare'*,  
I 've married a rich old lord,  
And you 're dubbed knight and an R. A.<sup>⑬</sup>

(ll. 57-60)

「でも、今やあなたは会議の席でPrince Albertにお目にかかれるようになったそうですね。私も盛装舞踏会で女王ともてはやされるようになりました。そしてその後、金持ちの老貴族と結婚しております。あなたは正式に剣打の儀式を経て勲爵され、Knightの称号を得られたとのこと。又、王立美術院の会員でもいらっしゃるとのこと。」

かつて青春の頃、人知れず、心を互に交わせたことのあった2人にとって、

⑫ 本文 Prince とはおそらくこの詩の書かれた時等、歴史的に判断して Queen Victoria (1819-1901) の夫 Prince Albert (Prince Consort) (1819-61) だと推定されている。

⑬ R. A. = Royal Academician = [英] 王立美術院会員

この1時はさぞかし感慨深いものであったろう。彼はあれ程熱心に念願していた程の彫刻家の巨匠にはなれなかったらしい。それでも、まあかなりの身分になっていた。Kate自身もGrisiを足下にひざまずかせるような大音楽家にはなれなかった。単なる社交界の花にすぎなく、莫大な遺産を目あてに、老いた貴族と結婚している自分を省みて、悲哀感に満されてしまっていた。

XVI

Each life unfulfilled, you see;

It hangs still, patchy and scrappy:

We have not sighed deep, laughed free,

Starved, feasted, despaired, — been happy.

(ll. 61-64)

「でも御覧のとおり、私達は私達がほんとに希望した人生の目的を、十分に果したわけではないのですね。今もまだどっつかずで、つぎはぎだらけの、不完全なものです。思えば私達は切なく深い留息をついたこともなく、声をあげて心から思う存分笑ったこともなく、飢えたことも、心から楽しいと思ったこともなく、絶望したこともなかったようです。結局仕合せではなかったということでしたね。」と彼女は嘆息するより外なかった。

これはひとりKateだけに言われることでなくSmithの場合もそうであったらしい。しかしBrowningはSmithに一言の弁明もさせていない。

XVII

And nobody calls you a dunce,

And people suppose me clever:

This could but have happened once,

And we missed it, lost it for ever.

(ll. 65-68)

「誰もあなたのことを愚者とは呼ばないでしょう。でも人々は私のことを抜

け目のない女と思っているに違いありません。私たちには1回だけ、結婚出来たかも知れない機会があたえられたのでした。でも私たち2人はそれを取り逃してしまっただけです。しかも永久に。」

この論文の初めにJ. FotheringhamがBrowningの“The Statue and the Bust”に関する解説をしたのを引用しておいたが、それに続いて彼の力説していた箇所を、もう少しつけ加えておきたい。それは正に“*Youth and Art*”の中に登場するこの男女に対する批判が適切になされているからである。

“Don't let the precious years slip through listless fingers, past a nerveless will. ... The crowning disaster is to miss life, whether by neutral quality or feebleness or cowardice. To allow circumstances to shut us out from life is to be entombed before we are dead, to be a ghost among the living; and from the shadowy land itself to look back on the dead years as lost opportunity, a tale of what might have been”<sup>④</sup>

“The Statue and the Bust”の場合と同様にこの2人は恋の芽生えを赤く燃え立たせることもなく、いたずらに時をすごしてしまったので、あらゆる面で満ち足りない、味気ない生活を送ることになった。かれらはあたかも、「死の訪れを待たずして、葬られた」敗残者でしかない。この世の亡霊の如き存在である、とFotheringhamはBrowningのmessageを伝えている。彼は重ねて次のように言葉を継ぐ。

“...What is the use of life? The use of life is to live; not the game nor the game's gains externally, but the full, free play, the honest and even intense development of the life itself, in all its powers and all its good.”<sup>⑤</sup>

④ James Fotheringham; *ibid.*, p. 210.

⑤ James Fotheringham; *ibid.*, p. 211.

—————, 箇所は筆者のもの。

彼らは人生は何のためにあるのかときくだろうが、「人生の目的は生きることにある。」と彼は答えている。しかし若い2人は自分たちが人生の目的としたところの一部しか達成し得なかった。その理由は“ They are worldly and cold, and you feel that their art is less because they are so. With more of the heart, and less of the world, their lives had been happier and their art higher,”<sup>⑩</sup>と明快に断じている。つまりFotheringhamは彼等が大芸術家になれなく、又真なる幸福を掴めなかったのは、この世的なものに眼をむけすぎ、精神的に高められ、愛に燃えるところがなかったからだ、と評しているのである。まことに彼らの人生の失敗の原因はここにあった、と頷ける。

#### (B) Too Late<sup>⑪</sup>について

この作品は前の詩と同じようなテーマによるが、その内容に少し変化を与えて作られたものと考えてよいであろう。これもやはり、*Dramatis Personae*の中に収録されている。時は1964年と、大体認められているが Kenyon は詩の書かれた日時については、確とした手掛りはない、と述べている。そして“... probably belong to the later years of the Italian period”<sup>⑫</sup>と記している。その題名が示すとおり、その内容は一目瞭然「おすすぎた」という悲哀感溢れる男のなげきの独白である。彼は一人の女性を深く愛していたが、彼女は他の男性と結婚してしまった。しかも彼女はもはやこの世の人でなくなっている。その女性に向かって彼が切々と嘆き訴えているところである。各連が12行を持つ12連よりなるかなり長篇の詩である。それ故、紙数の関係上、この詩に於いては前篇の詩のように各連にわたって訳や解釈をしないで、重点的に興味のある部分を、筋に従って拾い上げ、鑑賞して行きたいと思う。

詩は次のように、男が彼女に対してどんなに深い愛情を持っていたかを述べ

- ⑩ James Fotheringham; *ibid.*, p. 424.  
⑪ Sir F. G. Kenyon; Vol. 4, pp. 249-253.  
⑫ Sir F. G. Kenyon; Vol. 4, p. xxxiii



る所から始まる。

I

Here was I with my arm and heart  
And brain,all yours for a word,a want  
Put into a look —just a look,your part,—  
While mine,to repay it...vainest vaunt,  
Were the woman,that 's dead,alive to hear,  
Had her lover,that 's lost,love's proof to show!  
But I cannot show it;you cannot speak  
From the churchyard neither,miles removed,  
Though I feel by a pulse within my cheek,  
Which stabs and stops,that the woman I loved  
Needs help in her grave and finds none near,  
Wants warmth from the heart which sends it —so!

(II. I-12)

以上の独白の大意：僕は僕の腕や心や知力をもって此所にいました。これらをもしあなたが一言ほしいと言われるか、又目でお望みであることを示して下さいましたのでしたら、全部あなたのものですることが出来たのに。今は亡き人になったあなたが生きていて、私の愛の証しを、誇らしげにあなたに告げることが出来たら、どんなにか幸いであろうものを。しかしもはやその証しを示すとはかなわない。何マイルも離れた墓場に移されたあなたは、もはや話すことは出来ないのです。私は頬の中で激しく脈の打つのを感じます。墓の中にいる愛する人が、側に誰もいないのに、空しく助けをもとめていることを思えば一。しかも僕はその求めに応じる熱き心を捧げていますのに。

II

Did I speak once angrily,all the drear days  
You lived,you woman I loved so well,  
Who married the other? Blame or praise,

Where was the use then? Time would tell,  
And the end declare what man for you,  
What woman for me, was the choice of God.  
But, Edith dead! no doubting more!  
I used to sit and look at my life  
As it rippled and ran till, right before,  
A great stone stopped it: oh, the strife  
Of waves at the stone some devil threw  
In my life's midcurrent, thwarting God!

(ll. 13-24)

最愛のあなたが他の男性と結婚し、陰うつな荒涼とした生活を送っていることを知った時でも、僕は1度でも怒って何か言ったことがあったでしょうか。その時、非難したり、称賛したりしても何の役に立ったでしょうか。時が流れ、すぎた時にこそ神がどの男があなたにふさわしいと思われたのか、又自分にどんな女性がふさわしいと定められていたのかがわかるでしょう。すべては神の選び、さだめられたことと平静になろうとしていました。しかしEdithよ、あなたは死んでしまった。だからそんなことを考えても全く無駄であり、絶望である。

私はよく腰を下ろして、さらさらとさざ波を立てて流れ行く我が人生を振り返って見たものでした。ところがその流れの中に大きな石が転がり込んで来て、流れを堰き止めました。ある悪党が神の計画を阻止しようと僕の人生の半ばに投げ込んだその石に対して僕はどんなに戦いをいともうとしたことか。神はEdithと僕が結ばれるように定めていられたのに違いないと思って機会の到来を待ちのぞんでいたのです。

### III

三連からは要点だけに絞って独白を進めて行こう。

大きな“horrible stone”により僕の人生の旅路はその流れを阻まれていた

が、それでも1筋の水の流れがその隙間から逃れ出て、ゆっくりと、夕暮時の田園地帯を通り抜けていた。静かに音も立てずに、何ものにも妨げられることなく、彼らの生命の源である海にたどり着くまで、安らかに流れるのをみた。僕はこのような心の安らぎをおぼえ始めていた。

“Yet I see just a thread escape,deploy  
“Through the evening-country,silent and safe,  
“And it suffers no more till it finds the sea.”  
(ll. 28-30)

それから次のようにも思うのであった。

Or else I would think “Perhaps some night  
“When new things happen,a meteor-ball  
“May slip through the sky in a line of light,  
“And earth breathe hard,and landmarks fall,  
“And my waves no longer champ nor chafe,  
“Since a stone will have rolled from its place:let be!”  
(ll. 31-36)

もしかしたら、ある夜、何か今までになかった新しい異変が起り、玉のような流星が一条の光となって空からすべり落ちて来たのかも知れない。それで大地は荒い息遣いを立て、陸の境界標が地に落ち、僕の前途に立ち塞がっていた石は、その場からころげ落ちてしまった。だから僕の波はもはやその石を除こうと、音を立ててそれに噛みついたり、それをすり滅らそうとする必要もなくなったと思ったのだった。つまり彼女と夫との間に何が不和が起こったため、僕の進む道を塞ぐ必要がなくなったのだったろうか。それならば僕の前途にも彼女と親しく交わる機会が与えられるかも知れないと希望を持ち始めていた。

#### IV

ところが彼女は死んでしまった。万事休すである。彼女が生きていれば何らかの希望があるものを、彼女が死んだ日、僕の一生も終わった、と語り手はなげ

くのである。

But, dead! All 's done with: wait who may,  
Watch and wear and wonder who will.  
Oh, my whole life that ends to-day!

(11. 37-39)

「しかし死んだ彼女は全くあの男のものではなかった。又彼女のものでなかった彼、彼は去ってしまえばよいのだ！」と述べてから、終にBrowningにしては珍しく、激しい口調で以下のように、恋敵きのその男を殺してやりたい程の怒りを爆発させる。

Oh, my soul's sentence, sounding still  
"The woman is dead that was none of his;  
"And the man that was none of hers may go!"  
There 's only the past left; worry that!  
Wreak, like a bull, on the empty coat,  
Rage, its late wearer is laughing at!  
Tear the collar to rags, having missed his throat;  
Strike stupidly on — "This, this and this,  
"Where I would that a bosom received the blow!

(11. 40-48)

## V

I ought to have done more: once my speech,  
And once your answer, and there, the end,  
And Edith was henceforth out of reach!  
Why, men do more to deserve a friend,  
Be rid of a foe, get rich, grow wise,  
Nor, folding their arms, stare fate in the face.

Why, better even have burst like a thief  
And borne you away to a rock for us two,  
In a moment's horror, bright, bloody and brief:

(II. 49-57)

僕はもっと積極的にあなたに対処すべきでした。僕は1回だけあなたに僕の気持を一寸話した。それに対してあなたは1回だけ返事をした。それで万事がおしまい。Edithよ! あなたは僕の手の届かぬひとになってしまった。凡そ人は友を得んとすれば、それを得るに足りる何らかの手段を講じるもの。運を天に任せて、じっと手を束ねて傍観してはいまい。そこで僕は泥棒のように押し入り、あなたを奪い、2人のためだけの安全な所に、連れ去ろうと思ったのでした。一瞬、あなたに恐怖感を与え、残酷に思えたかもしれないが。だが僕は暴力を振るってそうすることは出来なかった。我に返って。気がとがめて。それにあなたの好きな奴がいると知ったから。

此の男は今白状した如く、論文の始めに述べた“The Statue and the Bust”の主人公Duke Ferdinand Iのように、終に決心どおりに恋する女性を奪って逃亡することが出来なかったのである。Edithの言った一言とは多分“No”であったろう。彼はそれに大きな打撃を受けて簡単に引き下がったのか、それとも、再び申し込むことの出来ない程、誇りを傷付けられたのか、弱虫であったのか、ともあれ、彼女の死によって凡てが「遅すぎた」破目に陥ってしまった。かくして彼も人生の敗北者となるのであった。

## VI

What did the other do ? You be judge !  
Look at us, Edith ! Here are we both !  
Give him his six whole years: I grudge  
None of the life with you, nay, loathe  
Myself that I grudged his start in advance  
Of me who could overtake and pass.

(II. 61-66)

僕はあなたに退けられたが、もう1人の男は何をしたというのですか。ほら、我々2人は今あなたの前にいます。Edith, よく見て、判断し給え。あなたが彼と結婚していた6年間のことは何もいいすまい。僕はあなたと共にあったこの人生を恨むことはありません。が、あなたの彼が、僕を追い越して、先にあなたを得たことを恨んだ僕自身がひどく嫌になったりしました。

But, as if he loved you ! No, not he,  
Nor any one else in the world 't is plain:  
Who ever heard that another, free  
As I, young prosperous, sound and sane,  
Poured life out, proffered it—"Half a glance  
"Of those eyes of yours and I drop the glass !"

(ll. 67-72)

もし彼があなたを愛していたのだったら、それでよかった。しかし彼はあなたも、誰も愛していなかった。それは確かです。それに較べて自由で、若くて、富裕で、心身共に健康である僕が、いのちをかけてあなたを愛し、誠心を披瀝したのです。あなたはそれを目顔で受け入れて下さりさえすればよかったです。

かくの如く、いくじなく、愛の表現を現実に実行出来なかった男のあわれな愚痴はなお続く。

## VII

Handsome, were you ? 'T is more than they held,  
More than they said; I was 'ware and watched;

(ll. 73-74)

あなたは美人だったろうか。人々がそれを見る程でもなく、うわさする位でもなく、気に止めてもなかった。だが、僕はあなたの姿に目を止め、よく見守っていたものでした。

The others ? No head that was turned, no heart  
Broken, my lady, assure yourself !  
Each soon made his mind up; so and so

Married a dancer,such and such  
Stole his friend's wife stagnated slow,  
Or maundered,...

(ll. 77-82)

ほかの人達はどうだったろう。あなたによって自惚れさせられた人も、悲嘆に暮れさせられた人もいない。だから僕の愛するひとよ、御安心なさい。男達はそれぞれあきらめてそれなりに己の道を歩いています。だれそれはダンサーと結婚した。これこれ、しかしかの人は友達の女房を奪ったとか、活気なく、だらだら、ぶらぶらしているとか、等々やっています。

VIII

On the whole,you were let alone,I think !  
So,you looked to the other,who acquiesced ;  
My rival,the proud man,—prize your pink  
Of poets ! A poet he was ! I 've guessed :  
He rhymed you his rubbish nobody read,  
Loved you and doved you — did not I laugh !  
There was a prize. But we both were tried.  
Oh ! heart of mine,marked broad with her mark,  
*Tekel*,found wanting,set aside,  
Scorned ! See,I bleed these tears in the dark  
Till comfort come and the last be bled :  
He ? He is tagging your epitaph.

(ll. 85-96)

僕が思うに、あなたは大方いつも、そっとさされていて、誰からも構われないでおられた！それであなたはおとなしく黙従する質の、私以外の1人の男に注意を向けたのですね。その男こそ僕のライバルである誇り高き男—詩人仲間の最高級品とでも彼をあなたは自慢すればよい！彼が詩人だったとは！僕が推

量したとおり：彼は誰も読まないような、くだらない詩をあなたに書いて与えたのだ。彼はあなたを愛していると言い、あなたを、可愛い子、呼ばわりしていた。僕は大声で笑わずにはいられなかった。競争するための価値ある目的物はあった！しかし僕等2人は試されたのだ。あゝだが我が心よ、僕は彼女によってはっきりした区別をつけられてしまった。僕には力も才能もないと見限られ、のけ者にされ、さげすまれた！ほら、みてごらん。何らかの慰めが得られ、涙を流さずにすむようになるまで、この暗黒の中で血の出る思いのする涙を流している。あなたの夫は今何をしているのだろうか？あゝ彼はあなたの墓に碑文詩をかゝっています。

## IX

If it would only come over again!

— Time to be patient with me, and probe

This heart till you punctured the proper vein,

Just to learn what blood is : twitch the robe

From that blank lay-figure your fancy draped,

Prick the leathern heart till the — verses spirt!

And late it was easy; late, you walked

Where a friend might meet you; Edith's name

Arose to one's lip if one laughed or talked;

If I heard good news, you heard the same;

When I woke, I knew that your breath escaped;

I could bide my time, keep alive, alert.

(ll. 97-108)

もう1度彼女に僕の愛を告白する機会が与えられるのだったら、どんなによ  
かろうものを！時がもう少し忍耐を持って僕の本心を探ってくれて、あなたが  
針で僕の動脈にさぐりを入れ、そこに流れているあなたに対する熱き想いや、  
血の流れを察して下さることを許してくれたのだったら、どんなによかったら



うか。そしたらあなたは、あなたが愛情を傾けていたあの平凡なかの詩人の正体を見破り、僕の方に顔を向けてくれたかも知れなかった。それにあなたは最近僕に対して親しさを見せてくれていましたのに。お互に心の通い合うことも屢々でした。ところがそれも束の間、僕が目ざめた時、あなたはすでに息を引き取ってしまっていた。しかし僕は油断なく、生きて、時を待つことが出来ます。あなたと共に相会う時の至るを。

この哀れな独白者をDuffinは次の様にかなり厳しく評している。“…this man has been ‘scorned’…‘set aside’in favour of ‘the other’ whom she married. He has gone on, rather idiotically loving and hoping that the husband will die and ‘Edith’ will then turn to him,instead of which Edith has died and it is now ‘too late’.”<sup>⑱</sup>

X

And alive I shall keep and long, you will see!  
I knew a man,was kicked like a dog  
From gutter to cesspool; what cared he  
So long as he picked from the filth his prog?  
He saw youth,beauty and genius die,  
And jollily lived to his hundredth year.  
But I will live otherwise: none of such life!  
At once I begin as I mean to end.  
Go on with the world, get gold in its strife,  
Give your spouse the slip and betray your friend!  
There are two who decline,a woman and I,  
And enjoy our death in the darkness here.

<sup>⑱</sup> Henry Charles Duffin; *Amphibian, A Reconsideration of Browning* (Bowes & Bowes,London,1956 ) pp. 105-106.

今や誰のものでもなくなったあなたの霊と共に僕の霊は生き続けて行くでしょう、ごらんのように！僕は1人の男のことを思い出す。彼は道路の溝から、汚ない下水溜の辺りまで、まるで犬のように蹴り飛ばされていた。しかし彼はその汚物の中から何か食べ物を拾い上げることが出来さえすれば、それで平気で無頓着だった。彼は青年が、美人が、天才が死んで行くのをみた。しかし愉快に陽気に百歳まで生きながらえていた。だが、僕はそんな生き方はしない。そんな人生をおくるものか！僕はあなたと共に、あなたの夫である配偶者に背き命のあらん限りこの絶望の暗がりの中にあっても霊的な交わりをもつたのしく、この世を送りたいのです。

以上のように述べ終えてからも、優柔不断で彼の心の真実を生前の彼女に伝え得なかった男は、次のように又綿々と亡き恋人の面影を追う。

## XI

I liked that way you had with your curls  
 Wound to a ball in a net behind:  
 Your cheek was chaste as a quaker-girl's,  
 And your mouth—there was never, to my mind,  
 Such a funny mouth, for it would not shut;  
 And the dented chin too—what a chin!  
 There were certain ways when you spoke, some words  
 That you know you never could pronounce:  
 You were thin, however; like a bird's  
 Your hand seemed—some would say, the pounce  
 Of a scaly-footed hawk—all but!  
 The world was right when it called you thin.

僕はあなたがあなたの長いカール（巻き毛）を頭の後ろにくるくるボールの様に束ねて、ネットを掛けてまとめているのが好きでした。あなたの頬は厳肅なキューカ派の娘のそれのように純潔そのものでした。けれどあなたの口は——今までに見た記憶がない程、ほんとおかしな口だった。それはきっちり閉まることの出来ない口だった。それから窪みのあるあの顎——何という変な顎だったろう！あなたの話し振りには何かある癖がありました。あなたが自分で気付いていたように、ある言葉がどうしても発音出来なかった。しかもあなたはやせていた。あなたの手は小鳥のそれのようにしか見えなかった。ある人達は、それをうろこのようになってる鷹の足の爪のようだ、と言っていた。世間の者共はあなたをやせていると言ったが、まさにそのとおりであった。

この語り手が熱愛していた、しかも今は亡きひとである彼女に話しかける、正直な堂々とした言葉には、我々の心を動かすものがある。彼が赤裸々に描く Edith は、決して外面的にはどう鼻目にみても、美人の列に加えられるような女性ではなかったらしい。むしろ欠点だらけの容貌と風采の持ち主だったことは否めない。しかし彼女にはそれらの短所を持ってしてもなお、この語り手の心を奪い、愛せずにはいられなくする何かを備え持っていたのである。それは言葉では簡単に説明しつくせぬ、内面的な魅力に外ならないと思う。

S. Orr もこの点を指摘し、次の様に解説する。“ ‘Edith’ was not considered a beauty. She was not one even in her lover's eyes. This fact, and the manner in which he shows it, give a characteristic force to the situation ”<sup>②</sup> Berdoe は男が恋人の外表面よりもその soul に対して抱いていた限りなく深い愛情を高く評価して、次の賛辞を送る。

“She was not handsome, — nobody said that. She had features which no artist would select for a model; but she was his life, and even now that she is dead he will be her slave while his soul endures. The poem is

② Sutherland Orr; *ibid.*, p. 237.

full of concentrated emotion, and is the expression of a strong man's life passion for a woman's soul; a passion unalloyed by any gross affection; such a love of one soul for another congenial soul as proves that man is more than matter,"<sup>①</sup>

Kenmare はll. 125~132を引用して、  
Brownig の描写力について以下の如く言及する "...there is in *Too Late* a description of the woman which in its bare colloquialism and quaint imagery has a very modern ring: ...In its complete divorce from the characteristics of his age, Browning's style is in fact unique." <sup>②</sup>

XII

But I turn my back on the world: I take  
Your hand, and kneel, and lay to my lips.  
Bid me live, Edith! Let me slake  
Thirst at your presence! Fear no slips:  
'T is your slave shall pay, while his soul endures,  
Full due, love's whole debt, *summum jus*.  
My queen shall have high observance, planned  
Courtship made perfect, no least line  
Crossed without warrant. There you stand,  
Warm too, and white too: would this wine  
Had washed all over that body of yours,  
Ere I drank it, and you down with it, thus!

(ll. 133~144)

僕はこの世に背を向けてひたすらあの世にあるあなたのことを思いつゞける。  
僕はひざまずきあなたの手を取り、私の唇にあてましょう。Edithよ！僕に生きよ、と命じてほしい。あなたの側に居て、僕の喉の渇きを癒させて貰いた

<sup>①</sup> Edward Berdoe; *The Browning Cyclopaedia* (George Allen & Unwin Ltd., London, 1931) p. 549

<sup>②</sup> Dallas Kenmare; *ibid.*, p. 144.

いのです。あなたは金銭に関する伝票のことは少しも恐れることはありません。あなたの奴隷である僕が支拂いますから。僕の靈魂が存続する限り。当然支拂うべきものを、つまり愛のすべての負債<sup>おいぬ</sup>を支拂います。それが僕のなし得る最高の正当な行為ですから。僕の女王であるあなたに最高の敬意と恭順を捧げ、婦人に対して持つべく定められている丁寧さを厳守しましょう。どんな小さなことでも、正当な理由なしに反対されることはないでしょう。ほら、あなたはそこに立っている、温かく、そして白く。僕がこのようにして葡萄酒を飲む前に、これであなたの體全体が洗らわれ、あなたがそれを下に置いたものであったら、どんなに幸なことかと思うのです。

こゝで144行にわたる男の独白は終る。男はこの世にありながらすでにあの世に移された彼女と、いつの日にか相まみえ、彼女と共にあり、彼女に奴隷の如く仕え、彼女を我がものと称えることが出来ると考えるのである。これはいかにもロマンテイクな発想であるが、これは夢の又夢的な自己慰めにしかすぎない。表題の如くすべてが遅すぎたのである。現実を無視して未来により頼む世界はない筈である。彼もBrowningの言う、現実の死の訪れを待たずして葬られたような登場人物の1人であるといえよう。

それでもSymonsはこの男の溢れるばかりの愛情の表現を次のようにほめて  
いる。

“His vague but vivid hopes of some future chance to love her and be loved; the dull rebellion of rashly reasoning sorrow; the remembrance, the repentance, the regret; are all poured out with pathetic naturalness.”<sup>②</sup>

### (C) Bifurcation について

F. G. Kenyon はIntroduction の中で “Bifurcation” に関して次の様に紹

---

○ Arthur Symons; *An Introduction To The Study of Browning*, (J. M. Dent & Sons Ltd., London, 1923) p. 138.

介している。“A very characteristic little poem. In form it reminds one of the pair of thumb-nail sketches, similarly summed up in a single couplet, in *Time's Revenges* (Vol III, p. 292). In substance it is characteristic of Browning as taking a common problem, a conflict between love and duty, and placing it in a light which makes the conventional solutions questionable, if not false. It illustrates Browning's delight in approaching a subject from an unusual point of view.”<sup>④</sup>

“Bifurcation”は1876年に*Pacchiarotto and other Poems*に掲載発表された。内容は表題の示すとおり、人生の分岐点、即ち愛を取るか、任務を取るかの分かれ道に立たされた2人の恋人がそれぞれの墓にしるした一種の告白文である。上記にKenyonが指摘したようにいかにもBrowningらしい奇抜な思いつきである。初めの20行が女性の告白であり、次の20行が男性のものである。その後につされた終わりの2行が実に見事な結びとなっている。この詩は前の2つの詩のようにくわしく解説をせず簡単に要点をまとめることにした。

We were two lovers; let me lie by her,  
 My tomb beside her tomb. On hers inscribe—  
 “I loved him; but my reason bade prefer  
 Duty to love, reject the tempter's bribe  
 Of rose and lily when each path diverged,  
 And either I must pace to life's far end  
 As love should lead me, or, as duty urged,  
 Plod the worn causeway arm-in-arm with friend.

(ll. 1~8)

我々2人は恋人同志だった。だから彼女の側に横たわらせてほしい。私の墓を彼女の隣に立てよ。そして彼女の墓に次のように刻んで貰いたい。「私は彼を愛していました。けれど理性は愛より任務を選ぶように、又誘惑者のばらや

④ Sir F. G. Kenyon; Vol. 9, p. ix “Bifurcation”は同書 pp. 46~47による。

百合の賄賂（わいろ）を受けないように命じました、2つの分かれ道に至った時に。私の生涯の遠い道を愛に導かれて行くか、それとも任務に説得されてそれに従うか、2つの中の1つを選ばねばならなかったのです。」

かくしてこの女性は愛の道を拒み、彼女に課されたより高き任務を第一と考えて、その道を歩むことにしたのだった。しかし彼女の心の奥深くには別な声もあった。

“But deep within my heart of hearts there hid  
Ever the confidence, amends for all,  
That heaven repairs what wrong earth's journey did,  
When love from life-long exile comes at call.  
Duty and love, one roadway, were the best —  
Who doubts? But one or other was to choose.  
I chose the darkling half, and wait the rest  
In that new world where light and darkness fuse.”

(ll. 13-20)

私は人生の旅路の中で、何か不幸なまゝならぬことがあっても、それに耐えて行けば、天はすべてを償ってくれるという確信を常に心の奥底にかくし持っていました。殊にあきらめていた愛が再びよみがえった時に、あの世で良きようにすべてがとり図られると。任務と愛の道が2つに分かれぬ広い公道があれば、それが最高です。誰がそれを疑うでしょう。けれど私はどちらか1つを選ばねばならなかった。私は薄暗がりの人生を選んだ。そして光と暗黒の融合する新しい世界で輝やく人生が到来するのを待ち望みました。

一方男の方も女を愛していた。そして同じように墓にその文字を刻んだ。

Inscribe on mine— “I loved her: love's track lay  
O'er sand and pebble, as all travellers know.

Duty led through a smiling country, gay  
 With greensward where the rose and lily blow.  
*'Our roads are diverse:farewell,love!'* said she;  
*"T is duty I abide by:homely sward  
 And not the rock-rough picturesque for me!  
 Above,where both roads join,I wait reward.  
 Be you as constant to the path whereon  
 I leave you planted!"* But man needs must move,  
 Keep moving—whither,when the star is gone  
 Whereby he steps secure nor strays from love?

(ll. 21~32)

愛の道は彼女のというようなものでなく、砂や小石のある所で、困難な道であった。その道を通ったすべての旅人が経験したように。しかし 'duty' の道はばらや百合が咲いている田園の芝地の中を通過していた。「私たちの道はこゝで分かれますよ。さようなら愛する人よ」と彼女は言った。更に続けて「私は質素な芝地である 'duty' の道に従います。石のごろごろする、生き生きした、見たのしい道は私のたどらないものです。しかしいつの日にか、'love' と 'duty' が融合するいと高き新天地で、あなたと再会できるのを待っています。それまで私があなただを残して来たその愛の道をひたすら歩き続けて下さい。私も私の道を忠実に歩き続けますから。」と述べた。しかし、男というものは、じっとしてられるものではない。常に動き続けるものだ。—しかも、彼は愛の対象、愛のみちしるべである星、つまり彼女に去られてしまったら、彼の愛をどこに注げばよいというのだろうか。彼は愛の道からそれ、つまづき始めた。

No stone but I was tripped by, stumbling-block  
 But brought me to confusion, Where I fell,  
 There I lay flat, if moss disguised the rock,  
 Thence, if flint pierced, I rose and cried 'All 's well!'

(ll. 33~36)



この詩の30~36行あたりについて数人からの批評があるので記しておきたい。  
Berdoe は前記30行以下について次のような解説をこゝろみている。

“ But, when the guiding star is gone, man's footsteps are apt to stray, and every stumbling-block brought him to confusion. And after his falls and flint-piercings he would rise and cry “ All's well! ” and struggle on, since he must be content with one of the halves that make the whole. ”<sup>㉕</sup>

Duffinは “ …the woman gave up love for a loveless duty, while the man continued to love, but, since his true love had lost its object, he strayed into sinful love, sometimes pleasurable, sometimes painful. Both believed the after-life would bring relief in the form of an existence in which love and duty could be combined, instead of, as here, one excluding the other. She chose duty by preference, he was forced into a life of ‘undutiful’ love. ”<sup>㉖</sup>と評する。

DeVane は簡潔に彼の意見を次のように述べる。

“ …the lives of the lovers are presented in two epitaphs; the woman chose the path of duty, the man was left in the path of love. Of the two, there seems to Browning no question but that the lot of the man was harder, and the poet's sympathy is

---

㉕ Edward Berdoe; *ibid.*, p.73.

㉖ Henry Charles Duffin; *ibid.*, p.108.

altogether with him.”<sup>㉑</sup>

更にBrowning はDeVane が以下に指摘するようなことをこゝろみていると思われる。即ち彼は“…is again taking delight in challenging the conventional solution of such a moral problem, as he had challenged such solutions in *The Statue and the Bust*.”<sup>㉒</sup> DeVane が言及しているのはこの詩の最後を飾る2行のことである。つまり

Inscribe each tomb thus: then, some sage acquaint

The simple— which holds sinner, which holds saint!

(11. 41~42)

と、作者は読者に疑問を投げかけ、1人楽しんでいるようである。この墓の中のいずれが罪人であるか、聖人であるか、という問いに対する答えはそう簡単ではない。しかしS. Orr は明快に次のように断ずる。2人の登場人物の中の女性の方はなだらかな、安全な道を選んだ。しかし男性の方にはstumbling-blocksが沢山おかれてあった。しかも“Love’s guidance is refused him, and he falls. Which of these two has been the sinner: he who sinned unwillingly, or she who caused the sin? We feel that Mr. Browning condemns the apparent saint.”<sup>㉓</sup>とのべている。

Berdoetはこの2人の恋人のうち誰れが罪人であり、誰れが聖人であるかを裁くに当り次の様に論をすゝめた。もし愛がすべてであり、もしこの世の最高最善なる愛が我々の最高目的であるならば、その女は罪を犯したことになる。彼女は恋人との結婚を拒んで別の道をえらんだから。しかし、もし彼女が「すべてをすて、吾に従え」という天よりの召命をうけて任務の方をいさぎよく、心よく選んだのだとすれば、それは聖なる人と言えるだろう。恋に生きる生活が必ずしも人生最高の生きる道とばかりは言えない、と彼は言うのである。更に

<sup>㉑</sup>と<sup>㉒</sup> William Clyde DeVane; *ibid.*, p. 359

<sup>㉓</sup> Sutherland Orr; *ibid.*, p. 218.

BerdoeはBrowning自身が幸福な結婚生活をしていたので少しそれを強調しすぎたのではないかとものべている。

最後にBerdoeの意見に続いてDallas Kenmareの主張に耳を傾けてみたい。詩の中の女主人公はdutyを取るかloveを取るかの決断をせまられた時、彼女は “I chose the darkling half and wait the rest/In that new world where light and darkness fuse” と述べていた。Kenmareはそれに対して “But it is conceivable,Browning would argue,that the choice of duty,certainly if it is felt as ‘darkling duty’,is the wrong choice.”<sup>㉙</sup>と批判している。Berdoeも先刻言った如く、心からよるこんでdutyに赴くのでなければSaintの業とは言われまい。更にKenmareは来世に於ける幸福とか、来世に於ける贖いとかは全くあてにならないと説く。“Again,there is little to be said for a faith in a heaven which repairs earth’s wrongs…We know nothing of heaven; our only intimation of what it might be are the moments of perfection intermittenly experienced on earth;we cannot therefore assume that the life beyond death will make ‘amends for all’,…” それ故に私たちに出来ることは “To live this life,the life we do know,intensely and fully is therefore the obvious,and reasonable, ‘duty’,which may also serve as Brownig elsewhere suggests, to make the next life more intense.”<sup>㉚</sup>と説明する。Browningは彼自らが出したこの詩の終わりにある問いに対し、何ら答えていないが、このKenmareの主張を、何と聞くであらうか。

### 終りに

この論文の中で以上3篇の詩を取りあげて解釈を試みたが相変わらず難解な所が多く、閉口した。又これを機会に更に研鑽を積みたいと思っている。

Kenmareが、“…God’s will for man is fullness of life.And love is the surest way to fulfilment.”<sup>㉛</sup>と述べているが、これに向かって努力し、勇

㉙ Dallas Kenmare;*ibid.*, p.133.

㉚ Dalla Kenmare;*ibid.*, p.133.

㉛ Dallas kenmare ; *ibid.* p.132

気をもって実行して行かなかった登場人物たちは皆「死の訪れをまたずして、  
葬られたも同然な不幸な人々」であるとBrowningはにんまりと微笑んでいた  
に違いない。

参考文献（脚注にある以外のもの）

1. Browning Poems :General Editors;Y.Okakura & S.Ichikawa  
研究社英文学叢書 主幹者：岡倉由三郎  
：市川三喜  
研究社出版 大正14年, 12, 26発行  
(1925)
2. Robert Browning:Selected Poems  
「ブラウニング詩集」：大庭千尋訳  
国文社発行 1977 初版発行
3. 「詩人ブラウニングの世界」 :土屋潤著  
八潮出版社 1980 初版発行
4. 「ブラウニング論」その詩と劇的独白：大庭千尋著  
国文社発行 1981 初版発行